airiti

『新生』の告白

林　寄　雯
安田女子大学大学院文学研究科博士後期課程

一　はじめに

『新生』第一部が大正八年の十月二十三日に『東京朝日新聞』で連載が終わった次の年の大正九年一月に、『婦人公論』は《島崎藤村氏の懺悔として觀た「新生」合評》を同月の「懺悔物語」号の一部として編集した。二十八人の同時代の批評が載せられた。過失を浄化し、立派な作品と高く評価する論もあるし、作者の執筆心理について疑いをもって、批判する論も見える。この褒貶相交わっているなかに、下記の論に注目したい。

私は新生を懺悔だと思ひません。

沖野岩三郎

島崎藤村の『新生』を懺悔の一種と見ることに不服です。

秋田雨雀

『新生』を道徳観や倫理観から突き詰めようとすれば、当然藤村の懺悔に不純があると認められる。『新生』のなかで懺悔することを書き始めているのは第二部の後半の第九十二回あたりからである。『新生』がまともに「懺悔」を取り入れた次の箇所をみよう。

自己の破壊にも等しい懺悔――彼は懺悔といふ言葉の意味が果たして斯ういふ場合に宛嵌(あてはま)るか奈何かとは思つたが、（『新生』二・九十二）

「懺悔」の意味は彼の今の心情に相応しいかどうかと思いながらも、懺悔を書くこと、皆の前で白状することは岸本に明るい希望を持たせる。それは次の箇所を読めば納得できる。

懺悔へ。岸本はどうして斯樣な心に成れたらうと時々自分ながらびつくりすることも有つた。彼の心がその方に向はうとした丈でも、何となく彼の歩いて行く路には新しい未來が感じられて來た。（『新生』二・九十三）

岸本にとっての懺悔への路は新しい未来につながる路である。ここでの懺悔はキリスト教における神に対して過去の罪を悔い改める意図が非常に稀薄である。そのかわりに、ルソーの『懺悔録』が書かれたように、真実を告白することによって自分の主張を表白しようとするところがありありと見えてくる。

本稿は藤村にとっての告白の真義、ルソーの『懺悔録』から受け継がれた精神、そして岸本の罪に対する態度と岸本の告白によって犠牲にせられた節子の悲劇について究明したいと思う。

二　懺悔と告白

『新片町より』に収録した藤村の明治四十三年『秀才文壇』に載った「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」の文章に、ルソーの「懺悔」を言及した。

しかしながら、真に束縛を離れてこの『生（ライフ）』を觀ようとするその精神の盛んなことは、又一生その精神を續けたといふことは、遂に私の忘れることの出來ないところだ。（中略）
私がルウソオに就て面白く思ふことは、文學者とか、哲學者とか、あるひは教育家とかの專門家を以て自ら任じなかつたところにある。唯『人』として進んで行つた處にある。あの一生煩悶を續けた處にある。（中略）
ルウソオの『懺悔』を讀むと、所謂（いはゆる）英雄豪傑の傳記を讀むやうな氣がしない。彼の『懺悔』は矢張り吾々と同じやうに、失望もすれば落膽もする弱い人間の一生の記録だ。多くのエライ人の中で、彼は最も吾儕（われら）に近い叔父さんのやうな氣がする。彼の一生は近づくべからざる修養とも見えない。吾儕は彼の『懺

悔』を開いて、到る處に自己を發見することが出來る。（「藤村全集」第六巻『新片町より』所収）

藤村が初めてルソーの『懺悔録』を読んだのは明治二十七年の夏、二十三才の年であった。同じ文章に、「私はその頃、いろ〳〵と艱難をしてゐた時であつた。心も暗かつた。で、偶然にもルウソオの書を手にして、熱心に讀んで行くうちに、今迄意識せずに居た自分といふものを引出されるやうな氣がした。」と述べたように、今迄意識せずにいた自分が引き出されることは藤村の自己を見つめる精神のきっかけとなったであろう。

この自己を見つめ、自己をはっきりさせる方法としての「懺悔」は藤村の人生の記録となった。馬場孤蝶が「ルウソオ『懺悔録』」（注１）の論に「『懺悔録』は真の人間といふものを描かんとした試みである。」と書いている。また、『懺悔録』が冒頭に「私はこれまでに先例のない、又今後に模倣者のあるまじき一つの企圖を懐いてゐる。私は我が同胞に、自然の儘を丸出しの人間一人を見せたいのだ。そして其の人間は私なのだ。」（注２）と示したとおり、ルソーは模倣者のない一人の人間をありのままに描こうとした。

『新生』を藤村の「懺悔録」とみなすとすれば、ルソーが求める真実の告白の精神は、その根底に流れていると思う。そしてルソーのように悩んでいる自分を救うために藤村は本を書いたのだ。真実を伝えることによってすこしでも自分の苦悩を減らす趣は『懺悔録』にも『新生』にも感じられる点である。

節子のモデル人物であるこま子は「新生事件」二十五年後、『婦人公論』に「悲劇の自伝」（注３）を執筆し、藤村に痛烈な批評を与えた。その文章に次のような述懐も述べられている。

> いろんなことを考へなければならなくなつたのは、叔父のいたましい程の苦悩が見え出した時からであつた（略）いまから思えば、あたし達は、あまりに真摯であつたために、悩み過ぎたのだ。

彼女はその叔父の苦悩を一番早く感じ取った人であつた。その二人

は、真摯であったため、悩み果てた。悩み果てたところに告白をした。どうして藤村はこうしなければならなかったのだろうか。そのまま隠してしまえば、誰にも分からなくて済むことなのに、どうして藤村はあれほど悩み果てたのだろうか。

フランス行きの船上で兄に告白の手紙を送った岸本は客舎で兄の返事を受けた。「お前はもうこの事を忘れてしまへ」「これは誰にもいふべき事でないから」と隠せば済むような兄からの戒めを受けた。『破戒』の丑松が真実を隠すことに耐えられなくて、生徒の前で告白したとは同質のものと考えられる。ここに一つの手がかりとして『新生』の次の描写を考えてみたい。

> 彼は節子と自分の間に見つけた新しい心が、その真實が、長いこと自分の考へ苦しんで來た舊い道徳とは相容ないものであることを知つて來た。人生は大きい。この世に成就しがたいもので、しかも真實なものがいくらもある。斯う深思する心は岸本を導いた。（『新生』二・六十五）
>
> 同族の關係なぞは最早この世の符牒であるかのやうに見えて來た。殘るものは唯、人と人との真實がある計りのやうに成つて來た。（『新生』二・七十四）

実際のモデル人物こま子は二人の真摯な心を述べた通り、『新生』の岸本は「人と人との真実」を発見したのだ。伊東一夫氏は「『新生』における透谷的精神」（注４）で「誠を残す」ことは藤村が「透谷から与えられた倫理の基本」であると次の通り指摘した。

> 無情の諸相のなかに〈誠〉を残すことは、透谷から与えられた藤村の倫理の基本でもあった。誠をもたぬ人間を、彼は平生から蛇蠍のごとく嫌っていた。自作の「いろはがるた」にも「誠実は残る」が入れられた。
>
> 「新生」が仮に道ならぬ男女間の愛であろうとも、その愛が残るに支えられているかぎり〈恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ〉（「厭世詩家と女性」）というあの透谷の、清教徒的な

airiti

浪漫的理想主義の精神に触れた時の、〈すくなくも自分等の言はうとして、まだ言ひ得ないで居ることを、これほど大胆に言つた人があらうか。捨吉は先づこの文章に籠る強い力に心を引かれた。〉〈読めば読むほど若い捨吉は青木が書いたものの中に籠る稀有な情熱に動かされた。〉（「桜の実の熟する時」）

という感動が、そのまま「新生」を貫く原動力となっていることを見逃すことはできない。

ここから分かるように藤村の「誠実は残る」ということへの信仰は透谷と知り合いになった明治二十五年から明治二十七年にルソーの『懺悔録』を読むに至って、熱心に探求した人生の題目であったはず。この人生の題目は『新生』に至って、透谷の暴露の精神からルソーの真実を告白する精神へと深まっていった。節子との間に見つけた人と人との真実は透谷が称賛した男女の愛の誠から、ルソーから啓発された人間の真実に到達した。節子との愛が人間の真実へと高まる岸本の内面を探ってみよう。

彼は節子に對する自分の誠實（まこと）を意識すればするほど、長い間の罪過の苦痛から脱却して行かれるばかりでなく、あれほど身を羞ぢた一生の失敗をも、我と我身を殺さうとまでした不德をも、どうやらそれを全く別の意味のものに變へることが出來るやうな、その人生の不思議に行つて衝當（つきあた）つた。（『新生』二・五十五）

岸本においては誠実があってから罪の苦痛がなくなる。ここから考えれば、『新生』第二部に描かれた節子に対する岸本の愛はこの誠実に根源を求めるべきである。真実があってから同族関係が符牒になる。真実があってから叔姪の不倫が不徳でなくなる。

真実を告白することによって、そして誠を残すことによって、自己の苦痛及び自己の虚偽を取り払うことができるとしても、岸本の場合には告白の対象になる節子の問題が孕んでいる。岸本の告白を全うさせる節子の犠牲に対し、岸本はどういう救済法を考えたかについて後に述べるが、まず、『新生』という「懺悔の書」を公にし

airiti

た岸本の心情を探ってみよう。

藤村が傾倒した『懺悔録』はルソー死後四年の一七八二年に第一部が刊行され、第二部は一七八八年に刊行された。ルソーは自分の真実を告白しようとすれば、他人をも真実を書かなければならないという理由で『懺悔録』を彼の生前に発表しなかった。それにしてもルソーの『懺悔録』に対し、誇張があるという論がある。『新生』は「自分の子供が大きく成つたら讀んで貰ふつもり」「自分の死後にでも發表すべきものではなからうか」そして、節子の「黙って置きさへすれば、もう知れずに濟むことなんですけれど」といったいろいろなためらいを含みながらも、『新生』は書かれた人物の生前に発表された。

ところで『新生』が書かれ始めた時点には「新生」の結果がまだ分からないというジレンマが潜在していた。これについて三好行雄氏は「『新生論』のために――主として方法をめぐって」（注５）の論に詳しく説明される。

> 小説の時間と実生活の時間との混同、ないしinterchangeableな関係の成立に、純粋私小説のあざやかなメルクマールがある。小説の時間というのは、決して比喩ではない。作中人物の生の軌跡とともに経過する表現世界の固有の時間が、作者の肉体が現実に生き、また生きた実生活の時間と癒着し、そこに往復可能の可逆関係が成りたつこと――それが、小説のリアリティを実人生のリアリティによって支えることの意味である。言語現象としての表現世界の固有の完結性と、それのもたらす実在感が見捨てられ、実人生における確かな手ざわり、なまな実在感がとって代わる、すくなくとも、両者の混在が許されるのである。自然主義が社会化した私に代えて、肉化した私を選んだとき、ここまでの過程がすでに予定されていたといえるかもしれない。

『新生』という、結末の見えない長編小説を起稿したとき、藤村の依拠した方法論が右のような私小説の自由であったこと

は明らかである。

『新生』のもう一つの大きな試みは暴露のモデルになる対象そのものがこの世の中にどう対処していくかという問題を孕んだことである。この問題をどう解決するかは『新生』第二部の第九十三回に答えを求めてみよう。

『あの事』を書いたら。そんなことは以前の彼には考へられもしなかつたのみか、成るべく『あの事』には觸れまいとして節子から來た手紙は燒捨てるとか引裂いて捨てるとかした以前の彼の眼から見たら、まるで狂氣の沙汰であつた。斯樣なところへ岸本を導いたものは節子に對する深い愛情だ。（『新生』二・九十三）

岸本の節子に対する深い愛情はどこに表されただろうか。それは節子をも真実への道を導いていこうとするところにである。懺悔の書が公になって、父義雄が岸本と義絶した後、節子が自分の内心を表白する長い手紙に「生命ある真の服從こそわが常の願ひに候」とあるように、岸本は節子をも「真実」への路に導いていこうと試みた。節子を台湾へ連れていくことが決まった後の民助と岸本との会話から岸本の節子への愛情の表し方が窺える。

『白状するだけ、まだそれでも正直なところが有るかナ。』と民助は笑つた。『貴樣もまあ、何か立派な仕事でもして、この不名譽を回復するがいゝ。』

『立派な仕事なんて言ひますけれど、あそこまで節ちやんを連れて來たことが私には可成な仕事でした（後略）』（『新生』二・百三十五）

実際のモデルが告白によって悩まされなければならないこと、犠牲にならなければならないことよりも真実の告白ははるかに大事であることを藤村は教えたいのだ。こま子が「それは殆んど私と叔父との交渉をありのまゝに藝術化した神品であるかも知れない。けれどもあたしにとつては、それは苦悩でしかなかつた。」（注６）と回想したように、こま子にとり告白は苦悩になってしまった。一方、

同じ文章の中に、「私の心は、その當時もいまもそのことについて恥づべき行為だつたとは思へない。たゞこの世の、この社會の規範にしばられて、あたりまへの女の生活が營み得なかつた丈ではなからうか。もしもわたしに真摯な氣持ちがなかつたならば、わたしは悲劇の中に泣く女でなかつたのだらう。」（注７）と記し、若き日の真摯な情熱に対し、後悔はない。文中に悲しみがにじんでいるけれども、歓喜すべき日々であったことが感じられる。

伊東一夫氏は『新生』の発表動機について「藤村の資質にかかわる良心的な苦痛」（注８）と次のように挙げられた。

> 罪過は、償い隠すことができても、隠さんがために自己と他人とを欺いた虚偽と偽善者としての自己のありかたについて、その良心の苦痛が、罪の償いとしての節子の救いとともに、彼の心を責めたててきた。このような虚偽偽善からの解放（それはキリスト教倫理に基づく信条でもあるが、他面からみれば広津和郎にみるような、リアリスト独自の真実を愛する強烈な精神の要求でもある。）への願いは、金や女性の煩いからの解放とは比較にならぬほど、もっと内面的な痛烈さをもって彼を襲ったにちがいない。

この論に基づいて考えれば、『新生』をそのモデルの生前に発表したことも、モデルのこま子が犠牲を払わねばならぬことも、もはや第二義的な問題とされることがよくわかる。本稿のはじめに藤村の『新生』が懺悔の一種であることの妥当性について疑問符を打った論があったことを述べた。ルソーの『懺悔録』という作品名は『告白』と改められる傾向が見られる。昭和四十一年岩波文庫出版の桑原武夫訳の『告白』はこの傾向の表れである。ルソーの『懺悔録』をその作品に内在する意味に基づいて『告白』という題目にする傾向である。前にも引用した『懺悔録』の創作意図から見ても、『告白』の訳が相応しいと思われる。ルソーの『懺悔録』にしても、藤村の『新生』にしても、自己の過失及び自己の内面を率直に偽りなく皆にありのままに言えることは独立した一人の人間が真実を求

めるときのありうべき姿である。『新生』はまさにこういう点を意識して書いた作品である。

一体、「懺悔」と「告白」との違いはどこに着目すべきであろうか。まず、『日本国語大辞典』（注９）を求めてみる。

【懺悔】　仏語。過去に犯した罪悪を告白してゆるしを請うこと。また、過去の罪悪を悔いて神仏や人々に告げわびること。

【告白】　心の中に思っていたことや秘密にしていたことなどを隠さないでありのまま告げること。

伊東一夫氏が「『新生』の宗教性批判」（注１０）の中にも懺悔と告白の境目を「懺悔とは罪を悟って悔い改め神に告白することであり、告白と同じ内容をもつ点で、神とのかかわりを前提としてのみ成立する。」とまとめた。

ここで一つ付け加えたいことは、懺悔は罪のゆるしを請う念願がその行為をそそのかす元もとの力であろうことだ。この類の懺悔はむしろ近世の近松及び西鶴の作に表される仏教の因果関係の内在する問題であろう。こういう意味から考えれば、『新生』は浅薄な意味の「懺悔」を越えて、人間の真実を真剣に求めようとする「懺悔」を成し遂げたい人の姿を描く作品である。本間久雄氏が「懺悔の観念は、自然主義勃興以來非常に變りました。殊に自叙傳的作品に於てそれは寧ろ一種の懐疑、自己批評といふやうな複雑な且つ深刻なものとなつて來て、前代のやうな佛教的或ひは宗教的色彩のものとは大へんに違つて來ました。島崎藤村氏の『新生』などは、この點からとにかく注目さるべきものであらう」（注１１）と指摘したように、『新生』は日本の近代小説の中では画期的な作品だと評価すべきである。

三　羞と罪の構図

前に述べてきたように、『新生』は人間の真実を追求する藤村の

試みである。芥川龍之介が『侏儒の言葉』の「「新生」讀後」に「果たして「新生」はあつたであらうか」と藤村の告白に疑問符を打った。その疑問に対する藤村の答えに、

もと〳〵私は自分を偽るほどの餘裕があつてあの『新生』を書いたものでもない。當時私は心に激することがあつてあゝいふ作を書いたものゝ、私達の時代に濃いデカダンスをめがけて鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた。荒れすさんだ自分などの心を掘り起して見たら、生きながらの地獄から、そのまゝ、あんな世界に生き返る日も來たと言つて見たいつもりであつた。

（「藤村全集」第十三巻『市井にありて』の「芥川龍之介君のこと」に所収）

と自分の時代の濃いデカダンスの中で何とかして自分らしく生きたいという意欲が強かった。『新生』第一部はこういうデカダンスから尾をひいてくる節子との関係をどう処置するかという問題からストーリが発展していく。作品に書かれたとおり、岸本は友人のちょっとした提案で、パリへ行き新しい言葉を学ぶことによって節子とのことを忘れようとする。この岸本の回避行為には彼のそれを羞じる心が潜在するがために、慌ただしく外遊を決めている点を指摘したい。第一部第十四回に岸本の自身に対する羞心が描かれた。

彼は悄れた節子を見て、取返しのつかないやうな結果に成つたことを聞いて、初めて羞ぢることを知つたその自分の心根を羞ぢた。彼は節子の両親の忿怒の前に、自分を持つて行つて考へて見た。彼も早や四十二歳であつた。頭を掻いてきまりの悪い思いをすれば、何事も若いに免じて詫の叶ふやうな年頃とは違つて居た。とても彼は名古屋の方に行つて居る兄の義雄に、また郷里の方にある嫂に、合せ得られるやうな顔は無かった。

（『新生』一・十四）

『私の様子は、叔父さんには最早よくお解りでせう。』という言葉で初めて知らされた岸本がこの第十四回で自分の不始末に対する最初の心情を表した。それ以来『新生』第一部にはこの岸本の羞心

が幾度も描かれる。次にあげてみる。

岸本は身體を紅くしてもまだ羞ぢ足りなかつた。（下線筆者以下同）（『新生』一・十六）

何事も打明けて相談して見たら随分力に成つて呉れそうな、思慮と激情とが同時に一人の人にある斯の友人の顔を見ながら、岸本は自分の身に起つたことを仄(ほのめ)かさうともしなかつた。それを仄かすことすら羞ぢた。（『新生』一・十八）

その幻の墓が見えるところまで堕ちて行く前には、彼は恥づべき自己(おのれ)を一切の知人や親戚の眼から隠すために種々な遁路(にげみち)を考へて見ないでもなかつた。知らない人ばかりの遠い島もその一つであつた。訪れる人もすくない寂しい寺院(おてら)もその一つであつた。しかし、左様した遁路を見つけるには彼は餘りに重荷を背負つて居た。餘りに疲れて居た。餘りに自己(おのれ)を羞ぢて居た。（『新生』一・二十六）

斯う岸本は言ひ紛らはしたものゝ、親切にいろ〳〵なことを教へて呉れる友人にまで、隠さなければ成らない暗いところのある自分の身を羞づかしく思つた。（『新生』一・三十）

弟の外遊を何か譽あることのやうにして盃を呉れる民助兄に對しても、わざ〳〵堺から逢ひに來て呉れた赤城に對しても、初めて顔を合せた御影に對しても、それから番町のやうな友人に對しても、岸本はそれぞれ別の意味で羞恥(はぢ)の籠つた感謝の盃を酬いた。（『新生』一・四十九）

その自分が斯うした恥の多い手紙を書かなければ成らないと書いた。（『新生』一・五十一）

『知らない人の中へ行かう。』

と岸本はつぶやいた。その中へ行つて恥かしい自分を隠すことは、この旅を思ひ立つ時からの彼の心であつた。（『新生』一・五十六）

羞(は)ぢても、羞ぢても、羞ぢ足りないほどの心で國を出て來た時、暗夜に港を離れ行く佛蘭西船の甲板の上に立つて最後に別れを

告げた時の彼は、實はあの神戸も見納めのつもりであつた。（『新生』一・百十九）

第一部ではまさにこういう羞じても羞じても足りないほどの岸本という人物像が浮き彫りされた。三年間の苦行で自分を隠してきた岸本は国に帰ってきた。再び節子と同じ屋根の下で生活する岸本は、深い哀れみから、節子を「救へないものかなあ」と思う。どうかして節子を救いたかった。そして「あの震へる小鳥のやうな節子を傍観し得」ない岸本にはどういう心情が起こったかというと、「罪で罪を洗ひ、過ちで過ちを洗はうとするやうな哀しい心」である。再び肉体関係に墜ちた岸本には、第二部の中で、罪意識の高揚が見られる。第二部に書かれた罪に関する描写を次にあげる。

歸國以來急激に變つて來た節子との關係から言つても、猶々それが出來なくなつた。罪の深いもの同志が如何に互の苦惱から救はれようとして悶かうと、誰がそんな寝言のやうなことを信じよう、さう考へて岸本は部屋の障子の側に俄然と立ちつくした。（下線筆者以下同）（『新生』二・四十六）

『お前のことを考へると、何と言ふか斯う道徳的な苦しみばかり起つて來て困つた。』（『新生』二・五十）

斯うした眠りがたい夜が續いた。過ぐる三年、罪過の苦痛に惱まされつゞけた岸本のたましひはしきりに不幸な姪を呼んだ。（『新生』二・五十三）

過去に於いて罪の深いもの同志が互に世の幸福を捨てるといふことは、實に一切を捨てるといふことであつた。（『新生』二・五十八）

岸本が淺草時代の終にあたる自分の生活をデカダンの生活として考へるやうに成つたのも、あたかもその生活の中に咲いた罪の華のやうに節子を考へるやうに成つたのも、それは彼の遠い旅に出てからずつと後のことであつた。（『新生』二・七十二）

その時になつて見ると、岸本が辿り着いた愛の世界は罪過の苦

しみから出發したところからは可成遠いものであつた。（『新生』二・百十）

節子ゆゑに、岸本はあれほどの苦惱を得たのだ。節子ゆゑに、岸本はあれほどの哀憐を感じたのだ。罪過も、旅も、それからまた互に一生を託するやうな悲哀も――一切は實に節子その人を對象にして起つて來たことだ。（『新生』二・百十一）

第一部において羞じを抱えて国を出た岸本はパリの戦争で再生の力を甦らせ、「生きたいと思はないものは無い」と思って、帰国への決心を固めた。第二部の岸本は節子との関係の復活で罪意識が高まってゆくが、そこで岸本が発見した回生の力とは自分の虚偽を取り除いて、一切を白状する道である。こういう虚偽を取り除く決心がやがて彼を懺悔の書を書くように導いていった。ここに至って岸本にとっての二度目の回生が訪れてきた。羞じを抱えて逃避する道を撰んだ第一部の岸本と罪意識の高揚によって「人と人との真実」を発見した第二部の岸本とを比べれば、第二部に描かれた人間の真実を求めようとした主題は『新生』を藤村の自伝の一部という私小説的性格を越えさせて、真実を伝える自然主義の極致が見られる。

四　岸本の回生と節子の犠牲

『新生』の第一部と第二部において岸本は再び回生の力を発見し、再生した。一回目は抑制と忍耐との苦行を続けた最中、第一次世界大戦に遭遇したフランス人の再生力に驚き、自分にもそういう再生の力があると悟った。巴里に着いた次の年、戦禍を避けるため四ヶ月間リモオジュに移住した。再び巴里に戻ったが、そこの周囲の空気を感じることで「いきたいと思はないものは無い」と自分に言い聞かせ、「曾て一度は頽廃したものの再生でないものは無かつた」と、新しい希望が燃え上がってきた。欧羅巴の寒い戦争が一層新しい時代を迎える芽の発芽力を刺激するように見えた。結局、

その芽が岸本にさゝやいた。

『お前も支度したら可いではないか。澱(よど)み果てた生活の底から身を起して來たといふお前自身をそのまゝ新しいものに更(か)へたら可いではないか。お前の倦怠をも、お前の疲勞をも――出來ることならお前の胸の底に隱し有つ苦惱そのものまでも。』
（『新生』一・百二十二）

この「生きたいと思ふ心」は岸本が自分の不始末を悩み、友人の元園町が酒場で『君も一度歐羅巴を見ていらつしやい……是非見ていらつしやい……』と励ました時、「どうかして生きたいと思ふ彼の心は、情愛の籠つた友人の言葉から引出されて行つた。」と『新生』第一部の第二十七回に描かれたように、岸本は「どうかして生きたい」思いの持ち主である。不思議にも「生きたいと思ふ心」を起こさせるのは俗謡を聞いた酒場である。和田謹吾氏は「藤村がなぜそれほど臨川のことばにヒントを掴みえたか」（注１２）と問題点を提示し、元園町のモデルである中沢臨川が書いた『嵐の前』という処女小説から藤村が与えられた影響を指摘した。『嵐の前』の一篇に中沢臨川が描いたニイチェの思想は『新生』に通ずるし、「心をおこさうと思はゞ先づ身を起せ」というニイチェのことばは『新生』発表直前の『海へ』にあげられたことばであると論じた。引き金がなければ潜在している力は発揮できない場合があると同じ、受け皿がなければいくらプッシュしても徒労である。藤村の場合はまさにこういう引き金と受け皿とがよくマッチしたと言える。このどうかして生きたいという願望が藤村の心底に潜んでいなければ、臨川の勧めを素速くキャッチすることはできないだろう。

『新生』第二部に描かれたように岸本は節子との再びの肉体関係の復活で罪意識に陥った。そこに「どうかして生きたい」思いの持ち主である岸本は再びの回生を求めねばならぬこととなった。二回目の「回生の力」はどこにあるかというと、懺悔の書を書く「告白」の行為に根差している。この「告白」の行為は藤村の真を求める独立した一人の人間への追求にも繋がっていくものであり、この方法こそが岸本に再生の力を与えた。もっと広い自由な世界へ行き

たいというのは再生への願いである。

「どうかして生きたい」「生きなければならない」岸本は、「懺悔へ」「懺悔へ」と自分の回生を求めるが、彼の回生に周囲が払った犠牲と言えば、言うまでもなく節子その人である。戦乱のためリモオジュの田舎に避難し、静かな田舎生活を過ごした頃の回想に、

> 假りに人生の審判があつて、自分も又一被告として立たせらるるといふ場合に當り、奈何なる心理を盾として自己の内部に起つて來たことを言ひ盡すことが出來ようかと。何物を犠牲にしても生きなければ成らなかつたやうな一生の危機に際會したものが、どうして明白な、條理の立つた、矛盾の無い、道理に叶つたことが言へよう。（『新生』一・九十八）

と岸本が思った。「何物を犠牲にしても生きなければ成らなかつたやうな一生の危機」を「新生事件」とすれば、「何物を犠牲にしても」の何物は節子、兄、兄嫁、子供と親類たちであろう。勿論、岸本にとって栄えある作家としての道も中に入ると考え得る。

懺悔の稿がぽつぽつ世間へ発表されていった後の輝子（節子の姉）の来訪に、次のような示唆深い会話が交わされる。

> 『俺の書いたものを讀んで見たかね。』と岸本は言つた。
> 『拝見いたしました。實に驚いてしまひました。まさか彼様なことをお書きに成らうとは思ひませんでした――誰だつて叔父さんの爲に惜まないものは有りません。』（『新生』二・百十五）

「誰だつて叔父さんの爲に惜まないものは有りません」といわれる岸本の本質はちょうど『新生』第二部第八十六回の節子の手紙に書かれた「叔父さんはわたしと違つて、きつと成功者ですよ――なんにも失望することが無いですもの」と相照らして見ることができる。

節子に対する救済のなさは輝子の口を借りて「節ちやんを奈何して下さいます」に表れている。「夢だつた」とでも言ってほしいぐらいである。正宗白鳥が言うように、「作者は彼女の臺灣行を壯と

してゐるが、私などは、懺悔により解脱した、所謂浮世の勝利者を彼女の上に見ることは出來ないで、浮世に惱み疲れた一人の淋しい女の影を、そこに見るばかり」（注１３）なのである。藤村の救済のなさに対する同時代の批判を二、三挙げることにする。

近松秋江は「島崎藤村氏の懺悔として觀た『新生』合評」（注１４）に次のように指摘した。

作外の實存人物なる姪に對しては、只管に氣の毒である。作者は二重に、二度まで姪を犠牲にしてゐる。一度は愛情の犠牲であつて、後には斯の如き人倫の秘密を世間に公表して、實存の姪をして、世間から顔を見られる境地に陥らしめたること。

「新生」作中の節子は、如上の意味に於て憐れむべきであるが、私は、それよりも作外實存の姪をして、人に顔を見らるゝ境地に置いた作者の、かゝる人倫の秘密を公表した事その事を、どうかと思つてゐる。

江間道助は「島崎藤村氏の『新生』」（注１５）で、岸本の節子に対する救済のすべのなさに不満を述べている。

彼は節子を大變に憐れんで居るが、其の後の節子がどんなに變つて行くか、迷惑げに傍觀して居るだけである。節子を幸福ならしめるやうな何等の試みをもしない。

藤村の資質を考える時、その「生」を求める執念こそが彼の精神を理解する鍵である。ルソーに対する「真に束縛を離れてこの『生』を觀ようとするその精神の盛んなことは、又一生その精神を續けたといふことは、遂に私の忘れることの出來ないところだ」（「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」前出）という藤村の感動はまさにこの「生」に注目する。大正十三年四月二十八日の静子夫人宛、生の肯定に関する藤村の書簡が、岸本の回生願望をそのまま表している。

「生を否定する惱みでなくて生を肯定する苦に巣立つて來た」とはある人がわたしの過去の半生を評して呉れた言葉でした。「生を肯定する苦み」がなかつたら長い〳〵艱難の生涯の後で

これをproposeするところまでわたしも進んで來なかつたかも知れません。（「藤村全集」第十七巻　書簡集）

『新生』第一部に描かれた巴里への外遊と第二部に描かれた懺悔の書を書くことが岸本のおのおの生を肯定する最大の努力である。回生するためには未練をもつ余裕はない。その回生のもとで節子を救済したい。告白によって回生を願い、自由な世界へ行って虚偽という束縛を離れる願望と共に節子の救済を求める。岸本は「自分を救はねば成らない同時に節子をも」救いたい。ここから考えれば節子の歩まなければならない犠牲の道はすぐに予想できる。ただし、節子の犠牲を縮小するための岸本の努力は外的なものよりも内面的なものであった。前に述べたように、節子に「生命ある真の服従こそわが常の願ひに候」に言わしめたのは岸本の愛情をこめた救済によってであった。

節子の救済を第二部では第一部と全く違う方向に岸本が運んでいく。『新生』を読む人は、巴里へ去った岸本が節子からの手紙を焼き捨てたり、あえて返事しなかったりする行動に、節子の純潔さと岸本の残酷さを思って腹が立つだろう。巴里に着いた五ヶ月目に、国からの便りで自分が新たに父になったことを知るが、産後の節子からこまごまと書いてきた手紙に対し、岸本は深い溜息をつくしかない。これほど節子の人生を犠牲にした岸本は、自分のことを忘れてほしいとあえて返事しないことに止まった。

第二部に登場する岸本が考えた節子への救済法はそれぞれの家庭をつくる方法であった。しかし、その方法はとうとう節子の「低気圧」によって挫折させられた。哀れみから節子に片手だけではなく両手をもあげたくなる岸本は「人と人との真実」に二人の救い道をみつけた。こういう「人と人との真実」に従う心はとうとう岸本を懺悔の書を書くまで導いていった。そして、節子の告白の手紙に書いてある「生命ある真の服従」にまで節子を導いた。『新生』第二部において、岸本が節子に対し、どういう考えを持って国に帰ってきたかは次の一節から窺える。

もしこれから無事に故國に辿り着くことが出來たら、自分も適當な人を見つけて、もう一度家庭をつくらうし、自分のために一生を誤らうとした節子にも新しい家庭の人となることを勸めよう、斯う彼は考へるやうに成つた。獨身の生活から引返して行つて二度目の結婚を實行しようと思ふ心――その心でこそ、彼は再び節子を見ることが出來るとも考へた。（『新生』二・八）

こういう考えを持って節子を救済しようとする岸本の節子への処し方は元の考えと違って、急転回をせねばならない。巴里の戦争によって回生の力を甦らせて、国に帰ってきた岸本にどうして二回目の回生が必要であろうか。節子との関係の復活がその最大の理由と言えよう。そこで自分の二度目の回生と節子を救う課題が再び浮かび上がってくる。「人と人との真実」は二度目の回生をなさしめる力であった。節子の救済は「生きたいと思ふ心」の持ち主である岸本の回生と不可分のものとして力が尽くされた。

ここで岸本は無責任者かエゴイストと思われがちであるが、そうではなくて岸本は「生きなければ成らない」という願望をいつまでも抱き続ける人間であって、何物を犠牲にしても彼の生を求め続ける人であることがわかる。

一方、節子は犠牲をどこまで受けねばならないのだろうか。節子の人生が犠牲にならねばならない理由を社会の側面から考えれば、法律上の問題は見逃すことはできないだろう。実際上、叔父と姪との間に起きた不始末関係の絡む『新生』は、藤村の告白の真偽の問われる一方、その法的な是非で世を騒がせた。

叔父と姪との結婚が許されることであったならば、節子は犠牲にならずにすむのだろうか。節子の犠牲を旧民法から辿れば少し解明できる。旧民法（注１６）人事編第四章第一節「婚姻ヲ為スニ必要ナル条件」の第三五条には次の通り示されてある。

傍系ニ於テハ兄弟姉妹及ヒ伯叔父姑甥姪ノ間婚姻ヲ禁ス

こうして、当時の法律から考えれば、三等親内の結婚が許されな

い時代に節子の犠牲は社会的に免れることができない。

節子の犠牲ということで、もう一つ考えねばならない点は里子の問題である。『新生』第一部第二十四回には、すでにこの問題に対面せねばならない場面が描かれる。

『節ちやん、そんなに心配しないでも可いよ。何とか好いやうに叔父さんが考へて進げるからね。』

斯う岸本は言つて、もしもの場合には自分の庶子として届けても可いといふやうなことを節子に話した。

『庶子ですか。』

と節子はすこし顔を紅めた。

不幸な姪を慰めるために、岸本はそんな將來の戸籍のことなぞまで言出したものゝその戸籍面の母親の名は――そこまで押詰めて考へて行くと到底そんなことは行はれさうも無かつた。

（『新生』一・二四）

伊東一夫編の『島崎藤村事典』（注１７）によれば、節子のモデルであるこま子に生まれた子は里子に出されたが、関東大震災の時亡くなった。実際のこま子の犠牲はこういう社会の因習に従った上であったから、一層無惨であった。後年のこま子が「肉親の相剋・憂鬱な人生の闘ひが叔父の理性の中に火焔となり渦となりはじめた。がわたしの前には肉親の相剋の前に一人の男が浮び上つた。孤獨感を慰藉する愛の對象としての男として現れて來たに過ぎなかつた。それは女の何人もが遭遇するやるせなさであり、そして女の悲劇が生み出される契機となつて行つた。」そして、「私の前に「愛する人」として登場した人が、あまりにも近親であつたが故に、それが悲劇を生むに至つたのであつたにしても、神の前に恥ぢない真摯な態度が強かつたと云つて非難される理由があるだらうか。」「悲劇の自伝」前出）と回想したとおり、近親から免れぬ悲劇はこま子の犠牲を加速させた。

五　おわりに

藤村の真実を追求する心は透谷、次にルソーから啓発され、藤村の生を見つめ続ける大きな力となっていることがわかる。『新生』の告白は虚偽を取り除いて事実を事実として言う人生の態度である。こういう虚偽のない人生を生きたい藤村の告白は「白状するだけにも正直なところがある」と民助兄にいわれるような岸本式の誠実でありながら、周りの破壊と周囲の犠牲が宿命的である。一切を白状したら、新しい生を蘇らせることができたとしても、一方の節子は岸本のその「回生」への道の犠牲にせられた。が、岸本において事実を事実として認めることが第一義である以上、節子の担わされた犠牲は残酷で、しかも悲劇で終わらねばならぬことは誰にも予想されることであろう。

後年のこま子と藤村の回想を読むだけで、『新生』は波乱万端のなかに書き上げた藤村の力作であることと評価したい。透谷やルソーに受け継がれた精神はパリ滞在中、フランスの近代化を見習った藤村において切実に捉えることができた。フランスでみた自由な人間の生き方と閉ざされた日本の社会を見比べ、日本の近代が抱えている性と愛の問題及び西洋と日本の相違を告白によって提示しようとした藤村の近代へ接近する精神は理解される。

注

（注１）馬場孤蝶　一九二〇年一月　「ルウソオ『懺悔録』」『婦人公論』　第四十九号

（注２）ルソオ著　石川戯庵訳　一九三〇年一二月発行　一九三七年一二月第十刷発行　『懺悔録』　岩波書店

（注３）長谷川こま子　一九三七年五月号、六月号　「悲劇の自傳」　『婦人公論』

（注４）伊東一夫　一九六九年三月初版　一九八〇年六月第３版　『島崎藤村研究――近代文学研究方法の諸問題――』　明治書院

（注５）三好行雄　一九八四年一月初版第一刷　『島崎藤村論』

筑摩書房
（注６）同注３。
（注７）同注３。
（注８）同注４。
（注９）日本大辞典刊行会編集　一九八五年二月第一版第十刷
『日本国語大辞典』　小学館
（注１０）同注４。
（注１１）本間久雄　一九二〇年一月　「日本文学に現はれたる懺悔物語因果物語」『婦人公論』　第四十九号
（注１２）和田謹吾　一九九三年一〇月第一刷　『島崎藤村』　翰林書房　一七〇ページ）
（注１３）正宗白鳥　一九二六年十月号　「文芸時評」　『中央公論』初出。「藤村全集」別巻に所収。
（注１４）近松秋江　一九二〇年一月号「島崎藤村氏の懺悔として観た『新 _』合評」『婦人公論』
（注１５）江間道助　一九二〇年三月号　「島崎藤村氏の『新生』」『文章世界』初出。「藤村全集」別巻に所収。
（注１６）吾妻栄編　一九六八年九月初版第一刷　一九九七年四月初版第十二刷　『旧法令集』　有斐閣
（注１７）伊東一夫編　一九七二年一〇月初版　一九八二年四月新訂初版　『島崎藤村事典』新訂版　明治書院

使用テキスト　「藤村全集」　筑摩書房　一九六六年十一月～一九六八年十一月